

た。また、家族の心電図を調べたところ、長男及び3男にQT延長が認められたが、遺伝子異常は認められなかった。

【結語】意識低下及び12誘導心電図よりQT延長症候群が疑われ、Holter心電図携帯中に心室細動にて死亡が確認された1例を経験した。不幸な転帰をとってしまったが、多彩な心電図変化が認められ、検討を兼ねて提示する。

2) CD36が欠損し¹²³I-BMIPP無集積をきたした心疾患における遺伝子解析

小川 祐輔・埜 晴雄 (新潟大学医学部)
 広野 暁・大倉 裕二 (第一内科)
 小玉 誠・相澤 義房 (新潟薬科大学)
 渡辺 賢一 (臨床薬理)

【目的】CD36は動脈硬化に関係する酸化LDL受容体のみならず長鎖脂肪酸輸送蛋白として脂肪酸代謝の面でも知られるようになった。一部の心筋症や虚血性心疾患などで¹²³I-BMIPPの心筋無集積を認めCD36欠損との病因の関連が注目されている。今回我々はCD36 type I欠損症例における遺伝子異常について検討した。

【方法】¹²³I-BMIPPの取り込みが欠損し、フローサイトメトリーにて血小板と単核球の両方にCD36が欠損していたtype I CD36欠損症例4例について検討した。患者の末梢血から単核球を採取し、RNAおよびgenomic DNAを抽出し、RNAに関してはrandom primerを用いてRTにてcDNAを合成した後、すべてのtranslated regionを含む、13個のexonについてPCRを行った。それぞれのPCR産物が1種類の場合はdirect sequenceを行い、2種類のPCR産物が存在した場合にはサブクローニングの後、各々複数のクローンについてsequenceを決定し、正常者と比較した。cDNAに異常を認めた場合にはgenomic DNAを同様に検索した。

【結果】症例1-3においてmRNAの解析で正常者にはみられなかったexon 4の一部の52塩基が欠損したmRNAが存在し、frameshift変異から⁴³⁷TGA stop codonを生じていた。また同じ3人でexon 9全体の70塩基も欠損しており¹⁰⁴⁷TGA stop codonを認めたが、いずれもgenomic DNAには欠損を認めなかった。genomic DNAの異常としては症例1, 4にT→790C/Ile→Thr, 症例2, 3に478C→T/Pro

→Serの2種類のpoint mutationを認めた。

【総括】①mRNAの塩基欠損はsplicingの異常によるものと考えられ、その結果生じるstop codonのためCD36の完全な蛋白合成できないことが原因と考えられた。②genomic DNAのpoint mutationもCD36欠損の原因に関連している可能性が考えられた。

第35回新潟救急医学会

日時 平成9年11月22日(土)
 午後2時～
 場所 新潟大学医学部
 第1講義室

I. 一般演題

1) 多発外傷と臓器不全におけるウリナスタチン(ミラクリッド)の作用

一瀬 充恵(持田製薬株式会社)
 救急現場で外傷患者は、外傷そのもので死亡する例の他に、ショックや臓器不全のために重態となる。死亡するといったケースが非常に多い。ショックや臓器不全に至る過程の状態に、SIRSという概念がある。SIRSの本態は高サイトカイン血症ともいわれており、組織消化により誘導されたサイトカインが外傷や熱傷から全身の炎症状態にし、ショック・臓器不全に至らしめるのに重要な役割を果たす。

持田製薬の多価酵素阻害剤ミラクリッド:MCD(一般名:ウリナスタチン)について、ほぼ臨床血中濃度に匹敵する濃度にてIn vitroの検討を、近年当社にて行った。その結果、TNF α 、IL-8などのサイトカインに対して用量依存的な産生抑制作用が確認された。また、外傷患者に対する臨床報告として岩手医大、遠藤らの報告がある。多発外傷を主な原因とする出血性、外傷性ショックの患者15例にMCDを総投与量として17.5万から150万単位を投与した。その結果、全症例においてすべてのショックスコアで顕著な改善がみられ、最終的に臓器不全症例はなかった。

このようにMCDは外傷などからショックや臓器不全に発展する段階で酵素阻害の他、サイトカイン産生抑制により、臓器不全発症を防止していると考えられる薬

剤である。

2) 歯の外傷とその対応について

伊藤 史生・渡辺 陽 (日本歯科大学新潟
 小林英三郎・佐藤 光 (歯学部口腔外科学
 又賀 泉 教室第2講座)

今回われわれは、1974年11月から1997年6月までの22年8か月間に経験した歯の外傷に関して1004例中524例637部位を検討したので、歯の外傷とその対応について治療例を含めその概要を報告した。

対象は年齢0歳から79歳で、平均は22.0歳であった。性別では男性348例、女性176例であり、性差は約2:1と男性が多かった。受傷原因として、転倒・転落が262症例で半数を占めた。来院までの期間は、受傷当日に来院している症例が245例であった。損傷の分類では、脱臼181部位、亜脱臼221部位、陥入14部位にあり、処置内容では整復固定227部位、経過観察183部位、抜歯105部位、修復61部位であった。合併損傷では、脱臼歯のみが167例、357例が軟組織、骨折にあった。受傷後約1か月での生着率は、脱臼91.6%、亜脱臼92.8%、陥入81.8%という結果だった。外傷歯の治療において、適切な歯の保存法、専門医による早期処置、合併損傷の有無やその程度が生着率を高める要因と考えられた。

3) 右横隔膜損傷による血胸の一例

羽賀 学・金沢 宏 (新潟市民病院心臓
 中沢 聡・山崎 芳彦 (血管呼吸器外科)

症例は2tトラックに跳ね飛ばされ受傷した53才の男性。他院に搬送され、右血気胸、脳挫傷、外傷性くも膜下出血、肝被膜下出血の診断で胸腔ドレーンを挿入され加療されていた。出血はドレーン挿入時に約500mlの排液、それ以降止まっていたが第4病日にせき込んだのをきっかけに500ml/時の出血が始まりショックとなり当科を紹介された。緊急手術を施行したところ右横隔膜に穿通傷とともに裂傷が認められ、この裂傷からの出血がショックの原因と考えられた。2-0タイクロン糸を用いて損傷部位を修復し手術を終了した。左に比べ少ないとされる右側の横隔膜破裂で受傷後長時間経てからの再出血を来した症例を経験したので若干の文献的考察を加え報告した。外傷性血気胸の症例は急性期を過ぎても慎重に経過観察する必要があると示唆された。

4) 新潟地域医療情報ネットワークプロジェクト

—地域病院当直情報システムの試み—

羽柴 正夫 (新潟大学
 医療情報部)
 吉川 恵次 (新潟大学
 救急医学部)
 鈴木 靖 (済生会第二病院
 内科)
 市川 高夫 (済生会第二病院
 麻酔科)
 広瀬 保夫 (新潟市民病院
 救命救急センター)

インターネットの医療への応用が期待されているが、アプリケーションが明確でないことなどから、医療機関の接続や医療関係者の利用は、未だ一部にとどまっている。そこで、地域におけるコンピュータネットワークの医療、保健、福祉への適用、病院情報システムなどネットワークの普及、インターネットの利用促進などを計るために、新潟地域医療情報ネットワークプロジェクトを開始した。独自ドメインによるホームページ (<http://www.lamen.or.jp/>) の公開、医療情報の交換を目指したメーリングリスト運用、インターネットの医療機関への導入支援などを行ってきた。今回、救急医療情報システムのプロトタイプとして、ホームページを利用した『地域病院当直情報システムの試み』を行った。IDとパスワードで保護されたページから、各医療機関で当直情報を入力・訂正し、閲覧は、特定のユーザーにのみ可能である。さらに、汎用のネットワークを基盤としているので、地域の住民への情報サービス、既にある全国自治体などの救急医療情報の利用、電子メールなどのインターネットでの資源の活用などが容易である。これらの仕組は、地域救急医療情報システムに、十分応用が可能と考えられた。

II. シンポジウム

【本県の救急、災害医療対策をめぐる最近の動向】

1) 新しい救急医療体制および救急医療情報システムについて

藤田 弘一 (新潟県医業国保課)

本年の3月に新潟県救急医療検討委員会と新潟県災害時医療救護対策協議会から2つの報告書が提出された。いずれも、今後の県の取組みの基本的方向を示すものであり、今後その施策化が課題となる。報告書に基づく救急医療、特に災害時医療救護対策について、今後取り組